

第 6 章

障害者のスポーツを取り巻く 社会的環境の変化

本調査のインタビューを受けてくださった識別番号 19、31、26、39、25、60、29(以上生年の早い順)の事例から、東京 2020 パラリンピック競技大会(正確には大会開催が決まった 2013 年)前後の選手の状況や社会的な状況を比較し、その変化をみていく。

識別番号 19 は 1955 年生まれ、1978 年にけがで脊髄損傷となった。その後約 1 年間のリハビリ期間中にパラスポーツに関する情報や関係者との出会い、車いすバスケットボールチームへの参加を経験する。1980 年にオランダでパラリンピックを目の当たりにし、大会への出場を目指すことになった。1988 年のソウル大会出場を目指したが日本代表になれず、車いすテニスに転向し、1992 年のバルセロナ大会出場を果たした。当時はパラスポーツ選手のための選手雇用などはなかった。この間は練習時間を確保しかつ、遠征費等を得るために非常勤職を掛け持ちする生活が続いた。常勤職の有給休暇日数では遠征や合宿に参加することができないこともあり、非常勤職を選択している。

識別番号 31 は 1966 年生まれ、1996 年 30 歳の時に視覚障害となった。その後スポーツに関する情報を求めて、市役所、県障害者スポーツ協会などを訪れるが、以前やっていた柔道に関する十分な情報を得ることはできなかった。その後も自ら情報を収集することで、ようやく柔道をやっている道場に出会う。しかし、障害を理由に何度も参加を拒否される。10 回目の訪問で偶然柔道をやっていたころの自分を知っている人と出会い、入会が許可された。識別番号 31 はその後も自転車の練習会場、トレーニングジム、陸上競技場でも同様の経験をするが、その都度、人間関係を粘り強く作り上げ、クリアしていった。自ら施術診療所を営むこともあったが、就労していない時期もあり、その間は妻の就労によって支えられることもあった。スポンサーや補助金制度により 2014 年からは競技に専念している。また今後を見据えて新たなスポンサーを探している。

識別番号 26 は 1980 年生まれ。1999 年 2 月に交通事故により右脚下腿を切断した。大学入学を 1 年延ばし、その間に病院での治療、義足の型取り、リハビリ等を行い、障害者スポーツセンターでリハビリやトレーニングを行ったことがきっかけで陸上競技と出会い、ハンドボールから

陸上競技へと移行した。大学入学後は陸上競技部で練習を重ね、シドニーパラリンピックに出場、その後 6 大会連続でパラリンピックに出場している。大学卒業後、「プロの義足アスリート」を目指し、100 社を回ったが、支援に応じてくれたのは 3 社だった。こうして 2005 年からプロアスリートとしての活動を開始した。その後、2009 年にはスポーツメーカーの契約社員に、2015 年には金融証券会社に正社員として入社し、現在に至る。

識別番号 39 は 1982 年生まれ、18 歳の時に骨肉腫を発症し、約 1 年間入院、左大腿に障害を負った。退院後、神戸市の広報誌で見つけた障害者スポーツセンターのバドミントン教室に通い始め、当該センターの指導員の誘いを受けシッティングバレーボールを始めた。その後、2008 年と 2012 年にパラリンピックに出場する。障害者雇用枠で金融証券会社に入社、選手雇用ではないため当初は海外遠征 1 回 30 万円～40 万円を自己負担していた。他のメンバーもアルバイトや副業などを行って経費をまかなっていた。2008 年以降、国からの強化費やスポンサー支援が徐々に整い始め選手の負担は軽減された。2019 年選手を引退し、指導者としての道を歩んでいる。

識別番号 25 は 1985 年生まれ、2004 年プールへの飛び込み事故で頸髄損傷、四肢麻痺となった。その後 1 年半をかけたリハビリの中で基礎的な日常生活技術を身につけるとともに、競技性のある運動やトレーニングを行うことで体力や技術を向上させた。ここでのスポーツとの出会いが、その後の生活に大きな影響を与えた。国立職業リハビリテーションセンターに移り、さらに 1 年間をかけてリハビリを実施する中で車いすラグビーに惹かれていく。2008 年にクラブチームに入り本格的に車いすラグビーを行うようになる。2013 年、東京オリンピック・パラリンピック招致が決定するまでは遠征費など自費でまかなっていたがその後は、地方自治体や競技団体からの各種補助金等により負担が軽くなった。現在ではパラアリーナで十分な練習を積むことが可能となっている。また、現在は金融会社選手雇用で採用され競技に専念できる環境を得ている。

識別番号 60 は 1997 年生まれ、先天性の左手指欠損である。5 歳でラグビーを始めて以降、空手、陸上競技、ボクシングなど多様なスポーツ

に親しむ。ラグビーをプレーしつつも大学 1 年時に大学の障害者スポーツ専門の教員に勧められアルペンスキーも本格的に始めた。スキーでの最初の海外遠征は 2016 年、用具や旅費はスポーツマネジメント会社が負担してくれた。その後も、競技団体からの補助、企業スポンサー大学からの奨学金(パラアスリート支援)などにより、経済的な支援を受けることができた。大学 3 年時には平昌パラリンピックに出場し、入賞を果たす。大学卒業後は選手雇用で雇用され、遠征費等を負担してもらっている。スキーシーズン終了後は国内でナショナルトレーニングセンター等を活用し、ウェイトトレーニング、低酸素室を利用したトレーニングなどを実施している。これらの練習メニューは国立スポーツ科学センターが作成している。現在の所属先企業は現役引退後も雇用継続の可能性がある。

識別番号 29 は 1998 年生まれ、中学校 3 年の時に交通事故に遭い大腿部を切断した。リハビリの中で障害者スポーツの知見のある医師に出会い、その医師が主宰する義足の陸上競技クラブに加わる。陸上競技への関心はロールモデルとなる選手が識別番号 29 に会いに来てくれたことが大きい。高校の陸上部にも受け入れられ活動を続けた。大学 1 年の時にはリオデジャネイロパラリンピックに出場し走り幅跳びで 4 位入賞を果たした。この間、高校 3 年生の時から企業スポンサーの支援を受け、プロ選手として活動を継続している。

図表 6-1 は今回登場していただいた 7 人のパラアスリートの競技歴と経済的な基盤及びスポーツ環境等に関する記述と社会情勢の変化についてまとめたものである。識別番号 60 以外は後天的に障害を持った選手である。識別番号 19 はパラスポーツが日本に根付き始めたころに障害を負っている。パラスポーツに関する情報はリハビリテーション機関やその関係者からの人づてに得ている。また、このころはリハビリテーションの期間が制限されておらず、長い、リハビリテーション期間の最中パラスポーツに関する情報を得、スポーツに出会っている。識別番号 26、識別番号 39、識別番号 25 にも同様の状況が見られる。パラスポーツの情報も少なく、インターネットの普及率も低かった当時はリハビリテーション機関等パラスポーツに関連する機関でなければ情報が得にくかったことが推察できる。識別番号 31 は自らパラスポーツに関する情報を積極的に

得ようとするもののすぐには情報を入手できなかった事例である。識別番号 60 は大学入学後、パラスポーツ専門の教員からパラスポーツへの導きがあり、スムーズにラグビーからパラスキーへ移行したことが読み取れる。

2006 年以降はリハビリテーション期間に制限が設けられ、従来のように長いリハビリテーション期間の最中にパラスポーツに出会うということが少なくなったと推察される。社会復帰する最低限の力を身につけたところに保険適用のリハビリテーション期間が終了することで、リハビリテーションの場でスポーツと出会うということは少なくなっていると考えられる。一方でインターネットの普及率は 2010 年で 78.2% であり、自ら望めば情報が手に入りやすくなっている。とりわけ 2013 年、東京オリンピック・パラリンピック招致が決定して以降は各種メディアに載るパラスポーツ関連の情報も増えている。パラスポーツに関する新聞記事数の増加を見てもそのことは明らかである。

選手生活を送るための経済的な基盤については識別番号 19 と 39 は選手生活全期間、識別番号 31 は 2015 年まで、識別番号 26 は大学卒業後から契約社員となるまで、識別番号 25 は 2014 年ころまで、共通して一般雇用あるいは遠征や合宿の時間を得るために非常勤職で得た収入を海外遠征等競技生活のために使う生活スタイルであった。また識別番号 26 はプロのパラアスリートとしての競技生活を切り拓いた一人であるが、100 社に依頼をして支援してくれたのは 3 社という状況であった。

2012 年日本スポーツ振興センターの、スポーツ振興くじやスポーツ振興基金を財源とした助成対象にパラスポーツ関連団体、選手も含まれるようになる。2012 年には組織基盤強化事業としての国際交流推進スタッフ育成やスポーツ活動推進事業、スポーツ団体大会開催助成の対象として日本パラスポーツ協会や関連団体が対象となった。2014 年にはスポーツ団体選手強化活動助成の対象団体として日本パラスポーツ協会が含まれるようになった。2016 年からはアスリート助成の対象にも加えられた。これらのお金の多くは日本パラスポーツ協会を通して、競技団体そして条件を満たす選手に助成されるようになり、選手の競技生活を支援する制度が整った。

2012年には企業からの支援を受けつつ競技を継続したいパラスポーツ選手と障害者の法定雇用率を上げたり、パラスポーツ選手を雇用することで社内活性化や企業イメージの向上等を図ったりしたい企業をつなぐ株式会社つなひろワールドが設立された。2014年からは同様のマッチングを行う JOC の就職支援制度アスナビの対象としてパラスポーツ選手も含まれるようになった。こうした制度のほかにも選手と企業を結びつける機会は飛躍的に多くなった。2013年以降も現役を続けた識別番号 26、識別番号 25、この時期以降に活躍を始めた識別番号 60、識別番号 29 は識別番号 19 の時代の選手と比べると企業からの支援、さらには日本財団パラリンピックサポートセンターを通じての支援、2013年以降広がった自治体からの支援などを受けることができ、経済的な不安は少ないといえる。これらの制度の多くは 2013年、東京 2020大会の招致が決まって以降に設けられたものである。100社を回って3社の賛同しか得られなかった識別番号 26と、高校3年生からスポンサーを得ることができた識別番号 29の違いがこの間の変化を象徴している。これらの制度の多くは現在も継続されており、パラリンピックのレガシーであり、選手の競技生活に大きな影響を与えている。

識別番号 25 はパラアリーナを拠点として活動していた。識別番号 60 はスキーのシーズンオフには国立スポーツ科学センター(JISS)がつくってくれた練習メニューをナショナルトレーニングセンター(NTC)でこなすことが多い。トップ選手の練習環境も東京パラリンピックを契機に整えられたものであり、競技力向上に大きな影響を与えていると考えられる。

最後に 7人の選手は、先天的障害、後天的障害の違いはあるものの全員スポーツが子どものころから身近にあり、スポーツ好きだったということが共通する。子どものころからスポーツを経験できる環境とスポーツ嫌いを生まない指導が障害のある人のスポーツ実施を促進させるための大きな課題といえる。

図表 6-1 選手のスポーツキャリアと社会変化

	1960	1970	1980	1990
社会情勢	64東京パラリンピック開催 74障害者スポーツセンター設立		98長野パラリンピック開催 ※90インターネット(IN)普及率0.02%	
識別番号19				
キャリア	55誕生	78障害発生	92パラ出場	96引退
経済面			・非常勤職で遠征費等捻出	・車いす製造開発・指導者・地域クラブ立ち上げ
環境面	・1年間のリハビリ入つてによる情報獲得			
識別番号31				
キャリア	66誕生			96障害発生
経済面			84会社勤務	96会社退職
環境面	・市役所・障害者スポーツ協会等で情報探す・道場・クラブ・スポーツ施設利用最初は理解得られず			
識別番号26				
キャリア	80誕生		99障害発生	
経済面				
環境面	・障害者スポーツセンター等でリハビリ			
識別番号39				
キャリア	82誕生			
経済面				
環境面				
識別番号25				
キャリア	85誕生			
経済面				
環境面				
識別番号60				
キャリア	97誕生(先天障害)			
経済面				
識別番号29				
キャリア	98誕生			
経済面				
環境面				

※インターネット普及率はWorld Bank "Internet users for Japan (ITNETUSERP2JPN)" 年次データ

2000	2010	2020			
	11スポーツ基本法施行	19NTCイースト供用開始			
	12JSC選手強化対象にパラ選手が追加される,つなひろワールド設立				
	13東京パラリンピック決定	21東京パラリンピック開催			
	06リハビリ期間の見直し(短縮)				
00 (IN) 普及率30.0%	10 (IN) 普及率78.2%	20 (IN) 普及率90.2			
00パラ出場	02世界選手権出場	14競技専念			
妻の支え有	06施術所開業	14施術所廃業・補助金			
	15-16スポンサー支援				
00パラ出場	04パラ出場	08パラ出場	12パラ出場	16パラ出場	21パラ出場
	05~08プロ選手その後アルバイト等.09契約社員.15正社員				
	・支援が得られたのは3/100社				
00障害発生	01バラスーツと出会う	08パラ出場	12パラ出場	19引退	指導者
	遠征1回数十万円自己負担06一般雇用(障害者枠).08以降、国からの援助が徐々に良くなる				
	・1年の入院生活 障害者スポーツセンター				
	04障害発生	12パラ出場	16パラ出場	21パラ出場	
	自治体・スポンサーからの支援21会社嘱託社員				
	入院・リハビリ約3年(バラスーツと出会う)		18パラアリーナで練習		
02ラグビー始める		16バラスキー	18パラ出場	オフシーズンはNTCで練習JISSが支援	
		当初から企業、大学、マネジメント会社から援助有			
		選手雇用			
	中3障害発生.リハビリ中陸上クラブ主催者(医師)、陸上選手と出会う				
	高2・本格的に陸上開始 16パラ出場				
	高3プロアスリート				
					選手雇用

(第6章担当:藤田紀昭)